

ずいそう

後輩に伝えたいこと

木谷 宗一



私が入社する頃、国内の建設業界では霞ヶ関ビルが完成し、超高層建築が一番注目されていた時代である。学生時代から超高層建築にあこがれを持ち建設会社に入社したならば是非やってみたいと思っていた。当時、各社の会社案内を見比べていた時、当社の会社案内の中に二つの目に留まったキーワードがあった。「悔いのない仕事」「血の通った仕事」この言葉が会社を決める決定的な要因となった。この世界に入ったからには選んだ道をどう生きるかを常に考えていた。本当に打ち込んでやっていたら自分の天職になるかもしれない。とにかく当時から同期の奴には絶対に負けたくないというハングリー精神だけは人一倍強かった。入社後、人事部に超高層建築の作業所希望を出し続けたが最初の作業所は地方の銀行の支店であり、正直落胆したことを覚えている。しかし、監理の厳しい教科書通りの作業所で基本を覚え、ようやく竣工した頃、52階の超高層建築の作業所の辞令が出た。この現場は巨大なシステムチックに動く工場のように見え、今までとは全く違った仕事があった。この頃は自分の担当はもちろんのこと、それ以外の仕事をくまなく見て回り、資料を頂き技術を盗むことに専念した。自分自身でやらなくても見ているだけで各作業の段取りが見え、次の作業所の工事計画に大いに役立たせることができた。その後、大小12か所の作業所を経験するたびに担当した仕事は歩掛を蓄積した。特に一人現場の経験は6か所あり、自分に負けることが許されない状況の中で自分自身を鍛えることができポジティブに生きることが自然と身についたことが強みとなった。

次に技術研究所の研修生となり、技術開発の機会が与えられた。この2年間をどう生きるかが今後の人生に大きく左右すると考え、今までに無い技術を開発したいと現場の問題点を改善すべく開発テーマを立ち上げた。余分なコンクリートを打ち、さらに研取るという場所打ち杭の杭頭処理を無くすために水中で分離しないコンクリートを開発し、国際特許6か国、国内特許13件を出願した。技術研究所での最大の成果は開発した技術よりも技術開発のプロセスを学んだことが一番大きな成果であり、その後の現業において大いに役立った。技術研究所から東京本店の技術部に配属さ

れ、5年半工事計画の業務をこなした。一般的な建築の工事計画はもとより、超高層建築からドーム・大空間建築と幅広く業務に携わった。中でも、私は機械化施工が好きで特に大型プロジェクトはいかに機械を有効に活用するかを常に取り入れた。自分自身で開発した機械も少なくない。今の建築技術者の大半は建築は建築担当者、機械は機械担当者と分業しているが当時は本当に専門家でしか出来ないことはお任せして、簡単な機能や組み合わせを考えて合理的施工方法を開発したものである。建築技術者は2割機械を取り込み、機械技術者は2割建築を取り込み、お互いを知ることがより生産性を高めることに繋がると確信している。

技術部時代から再び作業所に配属されて超高層とドームの大型プロジェクトを4件経験した。この頃の作業所でのモットーは「技術とは自分で開発するものであり、問題点を開発改善テーマとして考え、技術開発を推進しながら作業所運営を図る」であった。作業所着工時、特許5件、提案100件を目標と宣言して、作業所のベクトルを合わせた。

入社後、47%が作業所で53%が内勤（技研・技術部・生産本部）である。自分自身の会社人生を振り返り、経験から若い人によく言う言葉は「20代は体を使って仕事を覚え、30代は頭を使って仕事をし、40代は人を使って仕事をし、50代は組織を使って仕事をす」という。そして、「Positive Thinking Positive Action」人は考えることはできるが、なかなか行動に移すことが苦手である。たしかにそれなりにリスクが伴う。それを打破するには情熱を持ったプロフェッショナルになることが不安を取り除いてくれる。特に作業所におけるものづくりの楽しさを言うならば、仕事は難しいパズルを解くようなものである。だから楽しい。そして、達成感や充実感を味わうことが大切である。長い会社人生を振り返った時に、自分が自分の子孫に自慢できる仕事を残せるかどうかはすべて自分自身の生き方で決まる。